

# SHOW HEY シネマールム

★★★★

## シュトルム・ウント・ドラクツ

2013年・日本映画  
配給/ワイズ出版・138分

2014 (平成26) 年9月11日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

### Data

監督：山田勇男

脚本：山田勇男、高野慎三

出演：中村榮美子/寺十吾(じつなしさとる)/廣川毅/吉岡睦

雄/銀座吟八/小林夢二/

上原剛史/海上学彦/磯部

泰宏/松浦祐也/山本亜手

子/藤野羽衣子/宮内健太

/井村昂/川瀬陽太/流山

児祥/佐野史郎/あがた森

魚

## 👁️👁️ みどころ

このタイトルは一体ナニ？ドイツ語の履修者ならすぐにはわかるはずだが、ひょっとして本作はゲーテの『若きヘルテスの悩み』のような文芸作？否、そうではなく、本社はギロチン社に結集するアナーキストたちの青春群像劇だ。

大正12(1923)年9月1日の関東大震災に乗じた無政府主義者・大杉栄の虐殺をストーリーの軸として、大正ギロチン活劇は、「シュトルム・ウント・ドラクツ」(疾風怒濤)の如き展開を。しかして、そんな本作の今日的意義は・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□このタイトルはナニ？そこから何を連想？■□

今は、東宝を中心とする、宣伝に大金をかけた「商業映画」が闊歩しているが、そんな中で本作のような「超」異色作が公開されることにビックリ。さすが、十三にあるナナゲイこと「第七芸術劇場」と並んで、九条にある大阪が誇る個性派映画館シネ・ヌーヴォだと感じ。

そもそも、「シュトルム・ウント・ドラクツ」とは一体ナニ？大学の第2外国語でドイツ語を履修した人は、これがドイツ語だということはわかるだろうが、その意味まではわからないはずだ。パンフレットによれば、これは『疾風怒濤と訳す。18世紀後半、ドイツに起こった若いゲーテを中心とする革新的文学運動。理性中心の啓蒙主義に反対し、自然・感情・天才を重んじた。クリンガーの劇の題名に由来する(広辞苑より)』とのこと。そんなタイトルからは、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』のような文学作を連想するが、実は否、否・・・。

## ■□■たしかに青春群像劇だが・・・■□■

去る9月9日に宮内庁が「昭和天皇実録」(全61巻、1万2137頁)を公表したことによって、「昭和の時代」ががぜん注目を集めている。しかし、1912年から1926年まで続いた15年間の「大正時代」も、大正デモクラシーの高揚や陪審制の施行(1928年)に向けた準備など、興味深い時代だった。もっとも大正時代には、1923年9月1日に発生した関東大震災と、それに便乗した朝鮮人の虐殺や無政府主義者・大杉栄の虐殺など、暗い話題も多い。

映画には、「青春群像劇」というジャンルがある。寺山修司が主催した、「天井桟敷」で成長した山田勇男が演劇出身者やミュージシャンを集めて監督した本作は、その青春群像劇だ。ところが、その登場人物たちは放浪の旅を終えた中浜哲(寺十吾)、その旧友の古田大次郎(廣川毅)をはじめとする、ギロチン社という何ともぶっそうな名前の「政治結社」のメンバーたちというから恐れ入る。今どきの若者は「内向き思考」の弊害が指摘され、「もっと元気にならなければ!」と言われ続けているが、そうかといって本作のような若者の生き方を目標として提示するのはいかがなもの・・・?山田勇男監督は、今ドキなぜこんな映画を?



シュトルム・ウント・ドランクツ製委員会

## ■□■この無政府主義者たちは、それでも革命の闘士? ■□■

学生時代に学生運動にハマリ、マルクス・レーニン主義の基礎文献を一生懸命勉強した



### シュトルム・ウント・ドラクック製作委員会

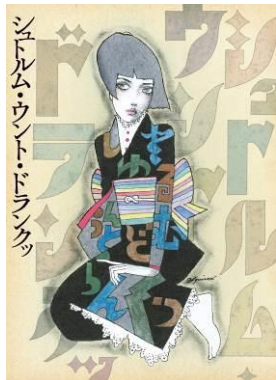
私は、無政府主義（アナーキスト）は悪いものだとか教わった。たしかに、中浜らが言うように、失うものがない「無産者」には、本作がテーマとしたような「テロル」しか革命の手段はないのかもしれない。しかし、スクリーン上にもみる中浜たちの行動には、「テロリスト」というほどの迫力もなければ、緊張感も感じられない。

山本薩夫監督の『戦争と人間』（70年）（71年）（73年）三部作で、山本圭が演じた標耕平の、当時非合法とされた日本共産党の地下活動を観ても（『シネマルーム2』14頁、『シネマルーム5』173頁参照）、また、若松孝二監督の『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程（みち）』（07年）での軍事訓練の様子を観ても（『シネマルーム18』56頁参照）、さらに、今井正監督の『小林多喜二』（74年）を観ても、革命のために命を捧げる若者たちの生き方は緊張感でいっぱいだった。しかし、アジトに集まった中浜たちの無政府主義者が花札に興じ、一升ビンを回し飲みしている姿をみると、天下国家を論ずるシーンが少ないこともあって、まるで社会の脱落者の集まり・・・？そんな雰囲気にな・・・。

## ■狂言回し役の謎の女性がストーリーを牽引！■

「所詮、この世を誡になった身」のアナーキストたちの結社だから、「ギロチン社」。そんなしゃれた（？）ネーミングは中浜が詩人なればこそその発想だが、官憲がそれを理解せず、弾圧のターゲットにしたのは当然。そんなギロチン社のアジトに足繁く「そば」を運んでくるのが本作のヒロインであり、かつ、狂言回し役になっている謎の女・松浦ミエル（中村榮美子）だ。

大正時代は参政権を含めて今より女性の地位が低かったはずだが、松浦ミエルを見ていると、その存在感と「任務」にかける情熱は頼りなさそうな男たちよりはるかに上。本作は



シュトルム・ウント・ドラクック製作委員会

演劇的雰囲気映画だから、普通の映画以上に「何でもあり」が許される。したがって、冒頭のシーンをはじめ、節目節目に登場し、本作のストーリーを牽引していく、この謎の女・松浦エミルに注目！

## ■□■アナーキストのくせに、この体たらくは一体ナニ・・・■□■

アナーキストを主人公にした映画の代表は、韓国映画『アナーキスト』（00年）だが、そこで見た5人のアナーキストたちの生きザマと死にザマは強烈だった（『シネマルーム8』89頁参照）。しかし、本作に観る若きアナーキ



シュトルム・ウント・ドランクツ製作委員会

ストたちのテロの実行ぶりを見ていると、いかにもヘマばかり。アナーキストとしてテロの実行に命を懸けるのなら、武術はもとより、刀剣の扱い、拳銃の扱い、爆発物の扱い等をしっかり訓練すべきだが、本作を観ているとヘマ続きだから、ついイライラしてくる。

2時間18分にのぼる本作は、大正11（1922）年2月から大正13（1924）年9月までの、ギロチン社に集まる中浜哲、古田大次郎（廣川毅）、和田久太郎（吉岡睦雄）、村木源次郎（銀座吟八）、倉地哲司（小林夢二）、仲喜一（上原剛史）、小西次郎（海上学彦）、河合康左右（礒部泰宏）、田中勇之進（松浦祐也）たちのテロの実行行為を描くが、きちんと成功した例は1つも無い。カッコ良く（？）成功したのは、今でいう総会屋まがいの恐喝で大金（小金？）を巻き上げ、みんなですき焼きを食べる資金にしたものだけだ。短刀を持って突進しても途中で逮捕されたり、ぶっ放したピストルが空だったり、投げつけた爆発物が不発だったり、部屋の中で爆発しても人が誰もいなかったり、とにかくやることなすことがドジばかりだ。そのくせ、このアナーキストたちを演じるのは芸達者な俳優ばかりだから、目的を達せず悔しがらる表情は、実によく演出されている。

大杉栄が虐殺されたのは、大正12年9月1日に発生した関東大震災の直後。そのため、翌年の命日にその復讐を期したものの、残念ながらその直前にアジトに踏み込まれて一網打尽に逮捕。そこで今更「計ったな、チクショーッ」「大杉の命日まで待つんじゃないか・・・」とわめくのは、あまりに情けないのでは・・・。

## ■□■たまには、こんな革命歌にどっぷりと・・・■□■

私は学生運動をやっていた当時、革命歌や労働歌もたくさん覚えたが、今ドキ真正面か

らそんな歌を歌う人はいない。しかし、山田勇男監督が演劇風に仕上げた本作のラストになる、カフェ南天堂のライブシーンでは、山田勇男監督がキャスティングした多くの個性的なミュージシャンが本作のためにアレンジした面白い革命歌を披露してくれるので、それに注目！



#### シュトルム・ウント・ドラクック製作委員会

9月13日の各新聞では、竹内まりやが33年ぶりに全国ツアーを開催することを報じたが、竹内まりやも既に59歳。また、サザンオールスターズの2013年夏のライブも大人気だったが、桑田佳祐も既に58歳。ちなみに、今年8月22日に開催された加山雄三のライブに桑田佳祐が突然「尊敬する船長！」と叫びながら乱入し、アンコール1曲目の『君といつまでも』でおなじみの「幸せだなあ・・・」で始まるセリフを、「幸せだなあ・・・。僕は加山さんがいたからここまでやってこられた。あなたは僕にとって音楽そのもの。輝く太陽であり、母なる海でもあります。一生、加山さんをお慕い申し上げます！」と語ったのは有名な話だが、「若大将」加山雄三も既に喜寿の77歳だ。竹内まりやの『人生の扉』は私の愛唱歌だし、加山雄三や桑田佳祐の湘南サウンドも私は大好きだが、本作を観れば、革命歌もインターナショナルばかりではないことがよくわかる。

本作ラストのライブには、それぞれのテロが失敗し、死刑、無期懲役、懲役〇〇年等々の有罪判決を受けて、刑務所に収監されているはずの中浜、古田たちもたくさん参加するので、是非観客も一緒にそんなラストを楽しみ、たまには革命歌にどっぷりと浸るのも一興かも・・・。

2014（平成26）年9月16日記